# **山霧藩**

# **北方を見渡せば、はるか遠くに白神の山々が連なり、西方に目をやれば、滓かに日本海が見える。**

# **ここは出羽の国、山霧藩一万石の領内である。**

# **山霧藩は真に小さな藩であるが、古くから日本海を走る北前船が立ち寄る能霧港（のむみなと）がある。**

# **港には人、物、金が集まり他藩に比べるとそれなりに豊かである。**

# **近頃領内で奇妙な噂が広がり始めていた。**

# **城下から二里ほど離れた場所に、いにしえの昔から土地の者が、亀宝（きほう）と呼ぶ泉がある。**

# **その昔、この地方が蝦夷地と呼ばれていた頃、朝廷が武力で攻め込み平穏に暮らす蝦夷と激しい戦をした。**

# **蝦夷は最後まで抵抗したが戦いに敗れ敗走した。**

# **逃げる途中、蝦夷に代々伝わる黄金の亀像を泉のどこかに隠した。**

# **それ以来亀宝の泉と呼ぶようになったと伝えられる。**

# **今の亀宝の泉は、樹齢二百年を越える天然杉に囲まれ、湧水を湛え、神が宿ると崇められている。**

# **その泉に人魚がいると言う噂が、山霧藩山川方三十俵二人扶持、松戸清八郎の耳に入った。**

# **「ふうん、人魚とは馬鹿馬鹿しい」**

# **清八郎は噂をはなから信じなかった。**

# **しかし見たと言う者が次々現れ、日増しに真のように広がった。**

# **清八郎の心中は穏やかでない。**

# **「ようし、その噂が真かどうか、確かめねばなるまい」**

# **清八郎は翌朝虎の刻に家を出た。**

# **文月の二十日だが虎の刻はまだ暗い。**

# **鬱蒼とした静寂の林の中を足早に歩いた。**

# **時々風が吹くと木々の枝がぶつかり、異様な音をたてて不気味である。**

# **少し心細くなった。**

# **山霧は天然杉の一大産地である。**

# **昔から京都、奈良、大坂で、城や神社仏閣に使用される良質な木材を供給してきた。**

# **山霧藩は今も、幾多の先人が育てた良質の木材に支えられている。**

# **半刻ほど歩いてようやく亀宝の泉に着いた。早く起きたせいか眠くなり、大きな切り株に腰を下ろした。**

# **清八郎はそのままうとうと寝てしまった。**

# **四半刻ほど寝たろうか。**

# **突然、ザブー、ザブーと、はじける水の音で目を覚ました。**

# **清八郎はとっさに起き上がり泉を見た。**

# **「あれはなんだ。**

# **泉の中央で何かが泳いでいる」**

# **ザブーと音がすると、岸辺に波が寄せてきた。**

# **突然清八郎は目を疑った。**

# **「人魚だ、人魚が泳いでいる。こちらに真っ直ぐ近づいて来る」**

# **清八郎は恐ろしくなったが、それでも見たくてたまらない。**

# **清八郎は気づかれないように木陰に身を隠した。**

# **泉にはうっすらと霧が出ていたが、その霧も刻が経つにつれ少しずつ晴れてきた。**

# **霧が消えるとそこには、年の頃は十四才～十五才と思われる美しい娘の姿があった。美しい顔立ち、黒髪、均整のとれた姿態を見て清八郎は夢を見ているに違いないと思った。激しく高鳴る胸の鼓動を必死で押さえた。**

# **気づかれないようにその場から立ち去ろうと振り向いた時、鋭い女人の声が清八郎の足を止めた。**

# **一瞬清八郎の背筋が凍りついた**

# **「誰だ、そこにおるのは、出て参れ、無礼者」**

# **清八郎は怖じ気づいて動けなくなった。**

# **強張る体の震えを抑え、恐る恐る女人の前に跪き、**

# **「お許し下さい。**

# **私は松戸清八郎と申す山霧藩の侍です。**

# **決して怪しい者では御座いません」**

# **と言った。**

# **女人はこの場で何をしていたのだと厳しく問い詰めた。**

# **清八郎は**

# **「亀宝の泉に、人魚がいる噂を聞き確かめに参りました」**

# **と話した。**

# **女人は少し間をおいて、**

# **「今日見たことは決して他言してはならぬ。全て忘れなさい」**

# **と厳しく言い放った。**

# **美しい娘は清八郎の顔をじっと見ていたが無言のまま風のように立ち去った。**

# **松戸清八郎には夢のような一瞬の出来事だった。**

# **あれから三年の時が過ぎ清八郎も二十二才になった。**

# **未だに志をもてずに、時が流れるままに生きる自分が怨めしかった。**

# **松戸清八郎は、時々三年前の出来事を思い出した。**

# **亀宝の泉で見た美しい娘の姿が目に浮かんだ。**

# **三年前清八郎が、美しい娘を見た日からなぜか人魚の噂がぷっつりと消えた。**

# **「どうしているだろうか、あの娘は」**

# **と思いながら清八郎は、いつものように巳の刻に家を出た。**

# **城下は相変わらず人の往来が激しく賑やかであった。**

# **ちょうど渡部屋の前を通り過ぎた時、大勢の人だかりが出来ていた。**

# **なんの騒ぎかと思い近づいた。**

# **その時である。**

# **人だかりの中から若い娘が清八郎の前に助けを求めて倒れ込んだ。**

# **娘は恐ろしさのあまり体を震わせ**

# **「どうか、お助け下さい。お助け下さい」**

# **と必死叫んだ。**

# **清八郎は戸惑った。**

# **清八郎の前に身なりの良い三人の若侍が立ちはだかった。**

# **まずいどうしようかと清八郎は思った。**

# **出来れば関わりたくない。**

# **このまま娘を放って立ち去るか、待てよ、ここで逃げたら、城下で笑いものになるに違いない。**

# **ここはひとまず相手の出方を見ようと思った。**

# **そして清八郎は若侍に言いはなった。**

# **「おのおの方、女人一人に大勢で乱暴とは、度が過ぎませぬか」**

# **と高声を上げた。**

# **若い三人の武士は**

# **「どけ、お前なんかの出る幕ではない」**

# **と叫んだ。**

# **それを聞いて何事かと町衆が集まり、辺りは騒然となった。**

# **清八郎は、ここぞと思い再び気勢を上げた。**

# **「松戸清八郎、女人一人を放って逃げたとあっては末代までの恥、腕に自信のある者はかかって来なさい。**

# **腕の一本二本斬り落として見せよう」**

# **それを聞いた三人の若侍は、怖れおののいて、早々に逃げるように立ち去った。**

# **清八郎は内心胸をなでおろした。**

# **震えながら清八郎の後ろに立ちすくんでいた娘は、清八郎の顔を見つめ何度も有り難う御座いますと礼を言った。**

# **その時である。**

# **清八郎は娘の顔を見て驚きのあまり言葉を失った。**

# **この娘は亀宝の泉で見た娘だ。**

# **しかしそんなはずがない。**

# **顔は似ているが立ち居振る舞いが全く違う。他人の空似だろうと思いながら、娘に名を尋ねた。**

# **「七重と申します」**

# **と娘は言った。**

# **松戸清八郎と七重の運命的な出会いであった。**

# **この一部始終を一人の女人が熱い眼差しで見ていた。**

# **女人は、着物の買い入れに来て偶然に松戸清八郎を見たのである。**

# **女人の名はお里、山霧藩一万石のご息女蒼姫の乳母である。**

# **お里の気持ちは激しく動揺した。**

# **松戸清八郎を見たからではない。**

# **お里は七重を見て動揺したのである。**

# **「蒼様によう似ておられる。**

# **これほど似ている女人がおるとは」**

# **お里は七重の後を追った。**

# **七重が西海屋の一人娘であることがわかった。**

# **お里は今日見たことは、姫様には言ってはならぬと心に決めていた。**

# **山霧藩一万石の藩主は山霧信貴公である。信貴公は、家臣領民から慕われ名君の誉れ高い。**

# **その信貴公も既に五十才になり、体力が衰え病気がちであった。**

# **正室お立の方との間に、嫡男和貴様と、ご息女蒼様がおられる。**

# **側室お由加の方との間に、盛貴様がおられる。**

# **ただ嫡男和貴様は、利発だが生まれつき病弱で、信貴公は世継ぎを巡って後々お家騒動が起きるのではないかと大変心配していた。**

# **すでに藩内を二分する勢力争いが、少しずつ始まっていたのである。**

# **数日たった牛の刻、ここは城下から北に二里ほど入った山中である。**

# **辺りは樹齢二百年を越えた天年杉の大木と、**

# **水楢、小楢、岳樺が点在する。**

# **一人の若者が杉の大木をじっと見上げていた。**

# **「この天然杉がこの山の主か」**

# **と若者は呟いた。**

# **樹齢は有に三百年は越えていて、切ってはならないとされるご神木である。**

# **古老の話によると、杉は樹高が高くなると、殆どが落雷によって焼失し、生き残ったのはこの一本らしい。**

# **若者はこの場所に来て、天に向かって真っ直ぐ伸びる杉を見上げると、少しずつ邪念が消え妙に心が落ち着くのを知った。**

# **この場所が大好きである。**

# **古くからこの地方を治めた領主は、この山を大事にしなければ生きられなかった。**

# **杉は一定の高さまで生長すると、良い木を残し他は伐採し余分な枝を切り落とす。**

# **一本の木に、光と栄養が十分行き届くように手入れがされ、山霧藩の財政を支えてきた。**

# **若者は先人に思いを巡らし杉の大木を見上げていた。**

# **突然どこからともなく二人の若者が現れ跪いた。**

# **「姫様一大事で御座います。**

# **お殿様がお倒れになりました。**

# **取り急ぎお戻り下さい**

# **「そうか、わかった」**

# **と言葉を交わし若者は急ぎ山を下りて行った。**

# **杉の大木を見上げていたのは、十八才に成長した蒼姫だった。**

# **山に入る時蒼姫は男装に身を変えた。**

# **城に戻り蒼姫は、乳母のお里に父上の容体はどうかと尋ねた。**

# **お里は**

# **「分かりませぬ、今ご重役の皆様がお集まりになっておられます。**

# **姫様も一刻も早くお殿様にお会い下され」**

# **蒼姫は父の元に向かった。**

# **信貴公がぐっすり眠っている姿を見て、声をかけようと思ったがためらった。**

# **蒼姫は無言のまま優しいまなざしで見つめていた。**

# **その後席を立ち、ご重役の間を横切ると、激しく言い争う声が聞こえた。**

# **山霧藩のご重役は、首席家老長井主善四百石、次席家老藤木又右衛門三百石、御側用人、五木新左衛門二百五十石、勘定奉行石井主計二百石、大目付松戸与五郎百五十石の五人である。**

# **五人の間でお世継ぎを巡って、すでに勢力争いが始まっている。**

# **蒼姫もおおよその状況は聞いていた。**

# **蒼姫は激怒した。**

# **すかさずご重役の間の襖を開けるなり言い放った。**

# **「不謹慎ではありませぬか。**

# **殿様の耳に聞こえますぞ」**

# **と高声を発した。**

# **首席家老、長井主善は**

# **「これは、これは、姫様」**

# **と深々と頭を下げた。**

# **わが母、正室お立の方は、嫡男和貴様をお世継ぎにと奔走し、首席家老長井主善と、御側用人五木新左衛門が後押しし、側室お由加の方は、盛貴様をお世継ぎにと奔走し、次席家老藤木又右衛門と、勘定奉行石井主計が後押しした。**

# **それから半年経っても、殿様の容体は回復しなかった。**

# **折しも領内は、今年も大凶作の様相であった。**

# **前年も、前々年も、干ばつによる凶作で、今年は特に春先から日照りが続き、稲が枯れ、畑の作物もほとんど枯れている。**

# **山霧藩は平野が多く米作りに適し、他藩から羨まれる藩であったが今年は違った。**

# **風の噂で南部の方は、大凶作による飢饉で、おびただしい数の餓死者が、道ばたに溢れて**

# **いると噂が広がった。**

# **大凶作とは収穫量が四分の三減の年。**

# **飢饉とは多量の餓死者が伴った年である。山霧藩も飢饉になるのではと領民の間で不安が広がった。**

# **連日ご重役が集まり対策を話し合っている。米倉の在庫でいつまで食いつなげるか。**

# **不足する米をどのように用立てるか。**

# **他藩からの流民にどう対処するのか。**

# **いずれも難題で、対策を誤れば一揆が起こることも予想された。**

# **そして神無月になり、収穫の時期を迎えたが、怖れていたことが現実になり大凶作となった。**

# **領民は日々の飯米にも事欠き、米の価格は跳ね上がり必要な品も不足になった。**

# **いつの時代も、弱い農民が一番の被害を受けた。**

# **そして各地の村で年貢増加に耐えきれず越訴がおこった。**

# **藩も値上がりする米の価格や、必要な品の価格を統制したが焼け石に水である。**

# **策として、凶作でなかった全国各地より北前船を利用して、米の買い入れを急いだ。**

# **山霧藩には北前船が入港する能霧港（のむみなと）がある。**

# **昔から幾度となく能霧港が、山霧藩の危機を救ってきた。**

# **能霧港は米川が日本海に注ぐ河口にある。米川の上流には銀や銅を産出する鉱山があり、米川を船で能霧港まで下り、北前船に銀や銅の鉱物、材木、米や大豆、小豆などを積んで京都、大坂、江戸に売り、帰りは各地の珍しい物産を積んで帰港した。**

# **山霧藩は、北前船による米の買い入れに大いに期待したが、今年は全国的に凶作で思うように仕入れが出来ず、また値段も例年の倍以上に跳ね上がった。**

# **そしてついに、山間部の民百姓に餓死者が出た。**

# **その噂は瞬く間に藩内に広がった。**

# **口減らしのため、娘の身売りも増加の一途をたどった。**

# **山霧藩の歴代藩主は、領民の幸せを第一に考え政（まつりごと）を行ってきたが、それが今崩れかかっている。**

# **ご重役は連日集まり協議を重ねた。**

# **ようやく日が経つにつれ、上方より少しずつ米が能霧港に入るようになった。**

# **藩が人命を第一に考え、高い価格の米を買い取ったおかげである。**

# **それから数ヶ月経って、ようやく領民の生活も、以前のような穏やかさを取り戻しつつある。**

# **しかし、領民の命を守ろうと高い米を買ったため、藩の財政は破綻寸前まで追い込まれた。**

# **この窮状を凌ぐためにどうすべきかご重役は協議を続けた。**

# **そしてようやく方針が定まった。**

# **策として、藩を支えている杉の伐採量を例年の二倍に増やし、新たな売先を見つけ、一日も早く財政難を解消することであった。**

# **しかし実現には、途方もない困難が生じることは言うまでもない。**

# **事態は急を要し首席家老長井主善は、病弱な藩主信貴公に謁見して状況を説明し、策を申し上げた。**

# **信貴公は承知し、早速領内にお触書が立ち、お触書には次のように書かれた。**

# **「来年正月五日より、杉の伐採を行う。**

# **伐採量は例年の二倍とする。**

# **仕事を求める者は、いち早く名主に申し出よ」**

# **と書かれた。**

# **領民は大凶作の今年、お殿様が上方より高い米を買って下さり、藩の財政が苦しいことを薄々感じていた。**

# **農閑期とはいえ例年の二倍以上の人数に達**

# **した。**

# **冬山の仕事は危険で厳しいが、藩の窮状を知り多くの年寄りも申し出た。**

# **その中には下級武士の次男三男も多く、松戸清八郎もその中の一人であった。**

# **そして師走になり大凶作に明け暮れた一年がようやく終わった。**

# **新年を迎え、正月気分がさめやらぬ中、山霧藩の命運をかけた一大事業が始まった。**

# **総責任者の材木奉行、榊源三郎はその手配に奔走しているが、困ったことに大晦日から雪が降り続いた。**

# **ほどほどの雪は、野も山も一面銀世界で、少しだけ見え隠れする枝の黒ずみが、まるで水墨画のようで美しいが、積雪はすでに大人の腰まであり、歩くこともままならなかった。**

# **例年にない悪条件の中を先ずは、山から麓の木場までの道を造った。**

# **また途中には五間幅の沢があり、橋も架けなければならなかった。**

# **いち早く工事を完成させるために、山師や領民が朝早くから日が暮れるまで、寒さと闘いながら働いた。**

# **そして十日余りで完成させたのである。**

# **いよいよ杉の伐採が始まった。**

# **冬の時期に伐採するのは理由がある。**

# **葉が落ち木の姿が見え、斜面の状態を把握出来る。**

# **杉は春先から夏にかけ最も生長し、反対に冬の時期は、水分が少なく乾燥して生長しにくい。**

# **生長する時期に伐採や枝打ちをすると、他の木と接触した場合、幹に致命的な傷がつき無節の良質の木材とならず価格が安くなる。**

# **また伐採した木を、麓の木場まで雪道を馬そりで運ぶか、丸太の先端をそりに乗せ金具で固定し、雪の上を大勢で引くのに都合が良いからである。**

# **木樵は山を見て、何処に倒すのが適切か、瞬時に判断する。**

# **倒す方向に約四十度の角度で斧を入れ、直径三分の一を切り落とした受け口をつくり、反対面に受け口より上に水平に、直径二分の一まで鋸を入れると、木はゆっくり倒れる。**

# **木樵の腕の善し悪しが、その後の仕事の効率を左右する。**

# **睦月も終わろうとしていたが、杉山の伐採は計画通り進んでいた。**

# **そんなある日のこと、今日も朝から順調に進んでいたが、昼の休息が終わって間もなく、見知らぬ若者が、二人の供の者とやって来た。**

# **若者は、木樵や人夫から少し離れた場所で、切り出す作業をじっと見ていた。**

# **供の者が、若者を警護する気配が感じられた。**

# **その様子を、たまたま松戸清八郎も見ていた。**

# **藩のご重役の子息が見聞にきたのだと思った。**

# **その時である。**

# **木樵が大声で**

# **「倒れるぞー、倒れるぞー」**

# **と叫んだ。**

# **樹齢二百年を越えた大木に、最後の鋸が入り、ゆっくりと倒れていった。**

# **ところが倒れた方向が悪かった。**

# **倒れていく大木が、十間ほど下方の立木に接触し跳ね返り、予定した斜面に倒れなかったのである。**

# **偶然とは恐ろしい。**

# **供を連れた若者に、覆い被さるように倒れた。**

# **予期せぬ出来事に供の者は狼狽し、大声で叫び一刻も早い助けを求めた。**

# **それを見ていた人足が周りに集まり、辺りは騒然となった。**

# **清八郎が急いで駆けよって見ると、若者は、幸いにも太い幹から無数に伸びる細い枝の下に倒れていた。**

# **真に運が良かったと言える。**

# **木樵は、急いで枝を切り落とし、若者をそっと抱きかかえ、平らな地面に寝かせたが、全く反応がない。**

# **見たところ体に枝が刺さり出血している様**

# **子は見られない。**

# **ただ意識がないので、供の者は途方に暮れ、慌てふためくだけである。**

# **「このままでは命がない。**

# **一刻も早く医者に診せるしか、救うことが出来ない」**

# **供の者を諭し清八郎は若者を背負った。清八郎の心には、この若者をなんとしても助けたいと思う強い信念が湧いた。**

# **これから若者を背負って、起伏がある雪の山道を下る。**

# **若者を背負う縄が切れぬように、清八郎の体に、太い縄が何重にも巻かれた。**

# **清八郎は万一の事を考え、予備として、わら靴と太い縄を供の者に持たせ、後ろに付いて来るように指示し急ぎ山を下り始めた。**

# **清八郎は無我夢中で走った。**

# **走りながらふと思った。**

# **いつもの道を通れば、無難に下山は出来るが時間がかかり過ぎる。**

# **一刻も早く下山しなければ、この若者の命**

# **が危うい。**

# **迷っている時間はない。**

# **清八郎は自分の勘を信じて、道がないうっそうとした森の中を、ひたすら走り続けた。**

# **そしてようやく、医者の松坂邸に辿り着いた。**

# **しかし若者の意識はなく、依然反応がない。清八郎は、すぐに背中から若者を降ろして、松坂邸に運ぼうとした時、突然供の者が清八郎を制止した。**

# **「大変ご足労をかけた。**

# **貴殿のことは決して忘れぬ。**

# **後日、藩より褒美の沙汰がある。**

# **ここからは、我々が付き添うので、どうかお引き取りを願いたい」**

# **清八郎は思いがけない言葉に、理由を聞こうと思ったが聞かなかった。**

# **今はこの若者が無事であればそれでいいと思った。**

# **清八郎の心はいつになく穏やかであった。**

# **昼七つを過ぎ、夕暮れの中を、清八郎は家路に着いた。**

# **我が家に着き**

# **「母上、只今、帰りました」**

# **と挨拶をすると、母は弱々しい声で、**

# **「お帰りなさい」**

# **と言った。**

# **清八郎は母と二人暮らしで、母は当に六十を過ぎ病弱であった。**

# **清八郎には兄幸三郎がいたが、幸三郎は他家に婿養子に迎えられた。**

# **兄は幼少の頃から秀才と言われ、特に学問に優れ、それを見込まれ、百石取り久米左右衛門のご息女お要様の婿となった。**

# **今は藩主信貴公のご近従として出世している。**

# **藩のために兄様は良く働きなさると、清八郎は尊敬している。**

# **母も口には出さないが同じ思いである。**

# **ただ少しずつ縁遠くなり、兄様の顔を見ら**

# **れなくなった母の寂しい思いが良くわかった。**

# **人にはそれぞれ宿命がある。**

# **清八郎は病弱な母の面倒を見ながら、いつの日か山霧藩の為に、命がけで働ける日を夢見て、来る日も来る日も山の仕事に励んだ。**

# **多少の事故はあったがこの三ヶ月、杉の伐採は順調に進んでいた。**

# **材木の売先も山霧藩江戸屋敷を通じて、大店の材木問屋と商いが纏まり、藩の財政に目途が付いたことが、首席家老長井主善の耳に入った。**

# **主善は**

# **「後一月は伐採を続け、藩の財政をより強固にしなければ」**

# **と考えていた。**

# **ここ数年凶作が続いている。**

# **この状態は今後も続くだろう。**

# **今年は百人以上の餓死者が出た。**

# **幸いにも領民が必死で堪え忍び一揆には**

# **ならなかった。**

# **もう二度と繰り返してはならない。**

# **なんとしても、山霧藩と領民を守らねばならぬと思った。**

# **主善は元々下級武士の家柄だが、お家の一大事には一身を懸け、先頭に立って難題を解決してきた。**

# **その功績が認められ、首席家老まで登り詰めた藩内一の賢人である。**

# **主善は郡奉行配下の時、くまなく藩内を見回り、多くの農民の日々の暮らしぶりを見てきた。**

# **夜明け前に起き、夜遅くまで黙々と働いても満足に食えない。そんな苦しい生活の中から年貢を納める姿を見てきた。**

# **この者達が山霧藩を支えていることを**

# **決して忘れてはならぬと肝に銘じていた。**

# **卯月も中旬になり、山霧藩の存亡を懸けた長い冬が終わり、雪が解け、待ちわびた春の気配が感じられる季節が来た。**

# **この四ヶ月間、藩のために働く領民の姿を見て、山霧藩一万石は今後も安泰だと清八郎は思った。**

# **皐月になり、野山の木々も一斉に芽吹き目映い新緑が心地よい。清八郎が待ち焦がれた山菜の季節が来た。**

# **体全体に嬉しさと喜びが湧いてきた。**

# **長年の経験で知ったことは、山菜は天候に多少左右されるが、大体同じ日に山に入れば取れることがわかった。**

# **その日は明け六ツに起きた。**

# **昨日の夜は興奮してなかなか眠れなかった。それでも母が握った梅干し入りの握り飯を二個、麻袋、つるで編んだ篭を腰にぶら下げ山に入った。**

# **皐月の早朝の空気は冷たく、澄み切って身が引き締まる。**

# **日の出は動物や小鳥の鳴き声もあまり聞こえない。**

# **静寂な森の中を歩きながら清八郎は、別世界に来たような不思議な思いに駆られ、自然に溶け込んでいる心地よさに幸せを感じた。**

# **木々の間から時々降り注ぐ朝陽を浴びながら、意気揚々とぜんまいが取れる山を目指した。**

# **目指す山は、樹齢三百年のご神木の近くを通っていかなければならない。**

# **今年もあのご神木に会えると思うと、妙に清八郎の気持ちは高ぶった。**

# **遠くにご神木が見えて来た。**

# **久方ぶりにご神木との対面だ。**

# **大きさも姿形も他の木にはない風格がある。**

# **そばに近づくと頭巾を被った一人の若者が、ご神木を見上げていた。**

# **清八郎は若者の邪魔になるまいと思い迂回しようとした。**

# **その時突然二人の若侍が、清八郎の前に立ちはだかった。**

# **清八郎は狼狽えた。**

# **「何者か」**

# **と叫んだ。**

# **すると一人の若者が**

# **「松戸清八郎殿、松戸清八郎殿」**

# **と名を呼んだ。**

# **続いて片方の若者が**

# **「その節は、貴殿にお命をお助け頂いた」**

# **と頭を下げた。**

# **「あの時のご無礼を平にご容赦願いたい」**

# **と再び頭を下げた。**

# **清八郎は、目の前の突然の出来事が理解出来なかった。**

# **すると一方の若者が、ご神木を見上げている頭巾の若者の前に突然跪いた。**

# **何かを伝えている素振りである。**

# **その様子を清八郎は不思議な思いで見ていた。**

# **頭巾の若者と跪いた若者が、清八郎に歩みよった。**

# **そして若者は跪き**

# **「清八郎殿、こちらは藩主、山霧信貴様のご息女蒼姫であられます」**

# **と言った。**

# **清八郎はとっさに慌てて跪き**

# **「は、はー」**

# **頭を下げた。**

# **清八郎は動揺し、頭の中が真っ白になった。すると蒼姫は思わぬ言葉を清八郎にかけた。**

# **「清八郎か、蒼と申す、**

# **いつぞやは山中で、大木の下敷きになった私を、そなたは背負って山を駆け抜け、町医者まで連れ立ったと聞きました。**

# **今こうして私が元気でいるのは、そなたのおかげです。**

# **そなたは私の命の恩人です。**

# **生涯決してそなたのことは忘れませぬ」**

# **と話した。**

# **清八郎はようやく事情がわかり**

# **「めっそうも御座いませぬ。**

# **そのようなお言葉を姫様から頂き、**

# **有り難き幸せで御座います」**

# **と言い、顔を見上げた。**

# **その瞬間清八郎は言葉を失った。**

# **忘れかけていた過去の記憶が一瞬に蘇った。あの亀宝の泉で見た美しい娘が、**

# **山霧藩一万石の姫だと知り、しばらく呆然としていた。**

# **すると、蒼姫は**

# **「清八郎はこれからどこに行かれるのか」**

# **と聞いた。**

# **清八郎は**

# **「ぜんまいを採りに参ります」**

# **と答えた。**

# **蒼姫はすかさず**

# **「ぜんまいとはどのようなものか。**

# **ぜんまいは何処にあるのか」**

# **としつこく再び聞いた。**

# **「ここから半里ほどの山中に**

# **生えております」**

# **と答えると**

# **「私も是非行きたいが良いか」**

# **と問うた。**

# **二人の供の者は困った顔をしたが、仰せに**

# **従いぜんまいを採りに出発した。**

# **蒼姫は山を熟知していて、どの山に珍しい木があり、どこが美しい景色か知っていた。また供の者より、姫が男装に身を変え山に入**

# **ることを聞いた。**

# **暫く歩き牛刻にぜんまいのある場所に着いた。**

# **しかし蒼姫は取ったことがなかった。**

# **辺り一面には、ここ数日で伸びたぜんまいが、綿毛を付けて見事に生えていた。**

# **手早く取る清八郎を見て蒼姫は負けまいと取り始めた。**

# **ぜんまいには、女ぜんまいと男ぜんまいがある。株状に生えるが、殆どが女ぜんまいで、その中に一本～二本男ぜんまいが混ざる。**

# **男ぜんまいは取らないのが決まり事で、女ぜんまいも子孫を残すために数本残す。**

# **清八郎は蒼姫に**

# **「姫様、全部取ってはなりませぬ。**

# **来年から生えなくなります」**

# **と話すと、夢中で取っていた蒼姫は少し機嫌悪そうに**

# **「清八郎、どれか、どれを取ってはだめなのか」**

# **と聞き返した。**

# **清八郎は困り果てたが**

# **「姫様、先端の部分が丸くて硬いのが男ぜんまいです」**

# **と教えた。**

# **蒼姫は**

# **「そうか」**

# **と頷き再び取り始め、一刻ほどで篭も袋もいっぱいになった。**

# **すでに未の刻になり、木の間から差し込んでいた陽ざしがない。**

# **陽が西に傾くと沢は一気に寒くなり様子が一変する。**

# **清八郎は蒼姫と供の者に急いで山を下りることを伝えた。**

# **別れ際蒼姫に礼を言おうと思ったが、再び会える気がして言わずに別れた。**

# **清八郎が急いで山を下りたのは理由があった。**

# **家でぜんまいを茹で上げる作業が待っていた。**

# **取ったぜんまいの綿毛を丁寧に取り除き、竈に火を焚き、鍋を架け、沸騰した湯の中でぜんまいをゆで上げ、広げた蓆で天日干しをするのである。**

# **この時期に毎年繰り返される作業を、病弱の母は楽しみにしていた。**

# **我が家にとっても春の訪れを感じる大事な行事になっていた。**

# **母の元気な姿を見るのも、そう長くないことを清八郎は知っていた。**

# **今年も無事に迎えられたことを感謝し、山の恵みにも感謝した。**

# **その後も度々山に入ったが、例年にない収穫があり母も私もいつになく喜びに沸いた。**

# **しかし清八郎の心は、偶然出会った蒼姫の面影が忘れられず晴れなかった。**

# **二十日ほど経ったある日清八郎は、ぜんまいと他の山菜を売りに、城下の八百屋にいた。**

# **毎年買ってくれる八百屋で主人とは顔なじみである。**

# **八百屋の主人の名は又吉と言った。**

# **清八郎は又さんと呼んでいる。**

# **「又さん。持って来たよ。**

# **今年のぜんまいは太いよ」**

# **清八郎が言った。**

# **すると又吉は**

# **「そうですかい。**

# **旦那のぜんまいは評判だから、お得意さんから注文が入っているよ」**

# **と言った。**

# **嬉しい言葉だった。**

# **どうか、高く売れてくれと願ったら、予想以上の一両二分の高値で売れた。**

# **今年も松戸家の暮らしを助ける山の恵みに改めて感謝した。**

# **今日は思わぬ高値で売れた。**

# **褒美に母に、美味しい物を買って帰ろうと思い店に入った。**

# **店に並んだ品物を見ると目移りしたが大好**

# **物の卵と鰊を買った。**

# **もっと買いたいが、たくさん買うと、もったいないと母が小言を言うのを思い出しながら家路を急いだ。**

# **西海屋の店先を通り過ぎた時、突然後ろから**

# **「清八郎様、清八郎様」**

# **と呼ぶ女人の声が聞こえた。**

# **清八郎は振り返った。**

# **そこに立っていたのは、いつぞや渡部屋の前で、若い武士の狼藉を受けた七重の姿であった。**

# **七重は少し笑み浮かべ**

# **「お久しゅう御座います。**

# **いつぞやはお助け頂いたのに、気が動転していてお礼も致さず、大変ご無礼を致しました」**

# **とかしこまった。**

# **そして**

# **「清八郎様、私の父です。**

# **清八郎様のお住まいも聞かないで、お礼の仕様がないと、父に大変叱られてしまいました」**

# **と話した。**

# **隣でその話を聞いていた七重の父は、清八郎の前で深々と頭を下げた。**

# **「西海屋勘助で御座います。**

# **娘の命をお助け頂き、誠に有り難う御座います。**

# **一人娘で世間知らずに育てたものですから、大変不調法なことを致しました」**

# **と再び頭を下げた。**

# **店先で主人勘助と、七重が低頭する姿を見て、番頭、手代、使用人は何事かと不思議そうにこちらを伺っていた。**

# **思いがけない成り行きに、清八郎は**

# **「とんでも御座いません。**

# **武士として当たり前の事で御座います」**

# **と言葉を返した。**

# **西海屋勘助は、一目見て誠実な清八郎を気に入ってしまった。**

# **まずは我が家でお茶を差し上げたいと説得され、断り切れずに清八郎は客間に通された。**

# **西海屋は、山霧藩の御用商人である。**

# **家の造り、庭の造りも見るからに豪華である。**

# **暫くして西海屋勘助が**

# **「大変お待たせ致しました。**

# **どうぞお気を楽にして下さい。**

# **只今娘が、お茶を持って参ります」**

# **と話した。**

# **清八郎は、我が家と違う商家のたたずまいに戸惑っていた。**

# **少し間を置いて、西海屋勘助は神妙な顔で思わぬ事を言った。**

# **「長年商いをしておりますと、否応なしに人を見る目はだけは備わってまいります。**

# **ご無礼を承知でお聞きしたいのですが**

# **西海屋勘助、松戸清八郎殿のお人柄に**

# **惚れました。**

# **清八郎殿には、ご内儀はおられるのか」**

# **と尋ねた。**

# **清八郎は思わぬ問いかけに動揺したが**

# **取り乱さないように落ち着き**

# **「妻は、まだおりませぬ」**

# **と答えた。**

# **それを聞いた勘助は**

# **「いらぬ事をお聞きしました。**

# **お許しを頂きたい」**

# **と頭を下げた。**

# **そして少し間をおいて**

# **「すぐにとは申しませぬが、娘の婿になって頂けませぬか」**

# **と話した。**

# **清八郎は再び驚いた。**

# **清八郎はすかさず**

# **「私には病弱で年老いた母がおります。**

# **これからも、母の面倒を見なければなりません。**

# **今はそのような気持ちは御座いません」**

# **とはっきり断った。**

# **それを聞いた勘助は**

# **「勝手な事を申し上げ、お気を悪くしない**

# **で下さい」**

# **と謝った。**

# **暫くして七重が**

# **「お父様、お茶をお持ちしました」**

# **とお茶を運んできた。**

# **七重は、重苦しいその場の雰囲気を察して**

# **「お父様、清八郎様に、何か難しい**

# **お話でもされたのですか」**

# **と問いかけ、笑みを浮かべた。**

# **とっさに清八郎は、**

# **「そのようなことは御座いません」**

# **と否定した。**

# **暫くすると、手代が**

# **「旦那様、お客様で御座います」**

# **と呼びに来て、勘助は席を立った。**

# **それから少しの間、七重と他愛もない世間話をした。**

# **七重はとても素直な性格で、年は清八郎より二つ上だが、気立ても良く気取らずに、自分のことをいろいろ話した。**

# **清八郎は、今まで経験したことがない、不思議な一時を過ごした。**

# **七重には、今まで多くの縁談話があったに違いない。**

# **しかし西海屋の婿となれば、そう簡単ではないのだろうと思った。**

# **帰り際に七重は、先日のお礼にと風呂敷に包んだ土産を渡し、**

# **「また是非、お会いしとう御座います」**

# **と言った。**

# **清八郎は七重の素直な優しさを受け入れていた。**

# **清八郎は、母に買った卵と鰊に、西海屋の土産を持っていつになく意気揚々と家路に着いた。**

# **戸を開けるなり、いつもより高声で**

# **「母上、只今帰りました」**

# **と言うと、母も今日がどんな日かわかっていて、明るくはずんだ声で**

# **「お帰りなさい」**

# **と返事をした。**

# **清八郎は**

# **「母上、山菜が一両二分の高値で売れました。**

# **帰り際に母上が好きな卵と鰊を買ってきました。**

# **今日はご馳走です」**

# **と話すと、母はにこりと笑みを浮かべた。親子に取って幸せな瞬間である。**

# **清八郎は**

# **「母上、これはきっと珍しい頂き物ですよ」**

# **と言って風呂敷に包まれた西海屋の土産を開いた。**

# **化粧箱の中には四角い棒状で、一個ずつ包まれた重みのある品が、綺麗に並んでいた。清八郎は早く食べたくて、一個を包丁で半分に切ってみた。**

# **切り口は薄緑色で、つるつるしていた。**

# **箱には茶羊菓子と書かれていて、食べてみると、お茶の香りと、なんとも言えない上品な甘さが口の中いっぱいに広がった。**

# **清八郎は思わず**

# **「とても美味しいですから、母上もお召し上がり下さい」**

# **と促した。**

# **清八郎は、茶羊菓子の名前は以前から聞いてはいたが初めて食べた。**

# **山霧藩は昔からお茶の栽培を家臣に奨励していて、他藩には北限のお茶として広く知られていた。**

# **いつの頃か定かではないが、京都よりお茶の種を取り入れて栽培したのが始まりで、この茶羊菓子も、お茶を加工して造られたお菓子である。**

# **母は初めて食べる茶羊菓子の美味しさに**

# **驚き、**

# **「このような高価な物を、どなた様から頂いたのですか」**

# **と聞いた。**

# **清八郎は西海屋から頂いたことを話し**

# **これまでの経緯を説明した。**

# **母は西海屋の七重様の話を聞いて、よほど**

# **嬉しかったらしく興奮していた。**

# **母は十五才で両親を亡くし、その後は苦労しながら仕事に精を出し、二人の弟の面倒を見たと聞いた。**

# **そればかりか父にも早く先立たれ、私と兄を育てた事を思うと、余生が平穏であれと願うばかりである。**

# **水無月なり山霧の里は、田植えも終わり、田んぼの水面が鏡のように美しい。**

# **一年中で最も穏やかな季節の始まりである。**

# **今年は天候に恵まれ、稲を始め作物の成長も順調で、数年来続いた凶作に奔走した藩のご重役も安堵していた。**

# **しかし、山霧藩は大きな難題を抱えていた。**

# **藩主は幕府の命により二年に一度、江戸に参勤しなければならない。**

# **信貴公の病気の快復はまだ十分ではなかった。**

# **信貴公が長旅に耐えられるか、ご重役の間で意見別れ再び争いが起こった。**

# **江戸までの道中で、病に倒れるような事態になれば、嫡男和貴様が山霧藩の藩主になるのが正当だが、側室お由加の方を始めご重役の中には、和貴様が病弱なことを理由に、盛貴様を藩主に押す勢力も根強くある。**

# **連日連夜ご重役が協議を続けている。**

# **首席家老長井主善と、御側用人五木新左衛門は、嫡男和貴様が藩主になるのが、山霧藩の行く末を守れると主張した。**

# **次席家老藤木又右衛門と、勘定奉行石井主計は、健康で利発な盛貴様が藩主になれば、幕府にも近隣諸藩にも、山霧藩の名声は高まり領内は豊かになると主張している。**

# **双方の対立は平行線を辿り、江戸出発が十日後に迫ったが歩み寄りがなく、結局今まで通り信貴公が参勤することに決まった。**

# **江戸に行くには、羽州街道を南下して、久保田、湯沢、新庄、天童、山形、上山を通り、桑折宿で奥州街道に入り、江戸を目指す長い道のりであった。**

# **水無月二十日、いよいよ出立の日が来た。出立を祝うかのように朝から晴れ渡っている。これから始まる長い道中の無事を祈り、家臣や町衆が殿様の行列を見送りに出た。**

# **お城の大手門が開き、藩主、信貴公は道中篭に乗り、大勢の供の者を従えて江戸に出立した。**

# **松戸清八郎も、兄幸三郎がご近従としてお供をするので見送りにきた。**

# **清八郎は遠くから、信貴公のお側に使える兄の立派な姿を見て、いつの日か兄様のように藩のお役に立ちたいと思った。**

# **暫く行列を見ていると、後ろの方で**

# **「清八郎様、清八郎様」**

# **と呼ぶ声が聞こえ、清八郎は振り向いた。微笑みを浮かべた七重が立っていた。**

# **「七重様も、見送りに来られたのですか」**

# **清八郎が聞くと、七重は**

# **「お友達のお兄様が、江戸に行かれると聞き、見送りに来ました」**

# **と話した。**

# **七重の隣には、同年代の女人が目を潤ませ暫しの別れを惜しんで見送っていた。**

# **暫くして七重は**

# **「清八郎様は、これから何処かにお出かけですか」**

# **と尋ねた。**

# **清八郎は躊躇しないで**

# **「これからの予定は何もありません」**

# **はっきりと答えた。**

# **「それではご一緒に、お団子でも食べませんか」**

# **と誘った。**

# **七重は友達と別れ、暫く清八郎と歩き、お店が立ち並ぶ団子屋に入った。**

# **清八郎は、誘われるままに七重と店に入ったことをすぐに後悔した。**

# **由緒ある西海屋のお嬢様が、昼日中私みたいな者と一緒にいて、いらぬ噂が発つのではと気が咎め、人目が気になり早くその場を立ち去りたかった。**

# **しかし七重は、穏やかでないこちらの思いをつゆとも知らずに、お美味しそうに団子を一皿平らげ、もう一皿注文した。**

# **清八郎には、団子がいつもより大きく思えてなかなか喉を通らず、何杯もお茶を飲んでようやく平らげた。**

# **七重は二皿目も平らげ**

# **「とても美味しかった」**

# **と満足した表情で言った。**

# **そしてお茶を飲み干した。**

# **飲み終わると七重の表情は明らかに変化していた。**

# **そしてしんみりと話し始めた。**

# **「私、清八郎様に謝らなければなりません。父が以前、初対面の清八郎様に、私の婿になって頂きたいと話したことを聞きました。**

# **大変不愉快な思いをされたと思います。**

# **父にそのようなことを言わせたのは、**

# **すべて私が至らぬせいです」**

# **と謝った。**

# **それを聞いた瞬間、清八郎はさっきまで抱いていた、浮ついた気持ちが何処かに吹き飛んだ。**

# **七重の父に言われたことは、他愛もない過去の事として受けとめていたが、神妙で必死な思いで話す七重の姿を見て清八郎は切なくなった。**

# **清八郎は**

# **「そのようなことは決してありません。**

# **むしろ光栄であり、大変嬉しく思いました」**

# **と心の内を正直に話した。**

# **思わぬ清八郎の言葉を聞いた七重の目には、嬉しさのあまり涙が溢れでた。**

# **清八郎への思いを益々強くした七重は、**

# **今ここで自分の思いを告げなければ**

# **後で後悔すると思い告白した。**

# **「初めてお会いした時から、一時も清八郎様のことを思わぬ日がありませんでした。**

# **清八郎様のことを、心よりお慕いしております」**

# **と話した。**

# **清八郎は、今にも泣きそうな顔で話す七重を見て、どうしてよいかわからなかった。**

# **ただ七重を愛おしく想う、偽りのない正直な気持ちは、ここで伝えなければならないと思った。**

# **「私も、七重様のことが大好きです。**

# **しかし、武士として、己のするべき事が**

# **まだわかりません。**

# **藩にお仕えする身なれば、藩のお役に立つことが私の生きる道です。**

# **七重様のお気持ちは、その時が来るまで**

# **大事に心の奥に仕舞っておきます。**

# **どうかお許しを願いたい」**

# **と話した。**

# **七重は清八郎の言葉を聞いて悲しそうに**

# **涙を浮かべた。**

# **清八郎はもう少し、情のある言葉を話せばよかったと悔やみ、薄情なことを言ってしまったと後悔した。**

# **互いを想い合う一時の時間が過ぎた。**

# **七重が少し冷静さを取りもどしたように見えた。**

# **おもむろに**

# **「わかりました。**

# **私もその日が来るまで、いつまでも**

# **清八郎様をお待ちしております」**

# **と言った。**

# **この言葉を聞いた時清八郎は、いつの日か七重を妻に迎え一緒に生きることを決めた。**

# **そして、互いに再び会うことを約束して**

# **家路に着いた。**

# **数日経った朝、お城で急ぎの登城を知らせる大太鼓が鳴り響いた。**

# **清八郎はすぐに羽織袴に身支度を整え城に向かった。**

# **今までも、大太鼓が鳴ると藩には容易ならざる事態が起きた。**

# **清八郎が急ぎ城内に入ると、家臣一同が何事かと互いに憶測を言い合い、大広間は騒然**

# **となっていた。**

# **暫くして次席家老藤木又右衛門が慌てたようすで入ってきた。**

# **次席家老藤木又右衛門から、驚く事態が伝えられた。**

# **「昨日の夕方、首席家老長井主善殿がお屋敷前で篭を下りた時、何者かに襲われた。**

# **幸い供の者が大声を上げ、長井殿は身を交わしたが、一太刀が左腕に当たり傷を負った。下手人は相当な使い手で、今くまなく探索しているが、一同にはいらぬ憶測や風評は一切慎むことをお願いしたい。**

# **また決して身内の者にも他言してはならぬ」**

# **ときついお達しがあった。**

# **清八郎は、事件の背後にお世継ぎ問題があると家臣が思えば、藩の一大事に発展し、他藩や幕府に知れれば、山霧藩の命運に関わるとご重役が判断し、先手を打ったのだろうと思った。**

# **しかし人の口に戸を立てられる訳もなく、**

# **噂は瞬く間に藩内に広がり、参勤で江戸にいる藩主信貴公にも、早馬で逐次状況が知らされた。**

# **病弱な信貴公は、この事件でさらに心労を深めた。**

# **下手人の探索は藩を上げて必死で行われたが、一向に進展せずしだいに藩政を混乱させた。**

# **十日後、亀宝の泉から男の水死体が上がった。**

# **水死体には、一太刀で絶命した深い傷があり、斬られた浪人が元藩士の熊崎半助だと知らされた。**

# **清八郎は、熊崎半助の名前を聞いて驚いた。熊崎半助は、兄幸三郎の竹馬の友で、剣に懸けては霧心流免許皆伝で、当時藩内では五本の指に数えられた剣の達人であった。**

# **幸三郎兄様の友なので半助の顔は良く見知っていた。**

# **両親を早く亡くし、姉上と二人で暮らして**

# **いたが、その後行方知れずになったことを思い出した。**

# **あれからどのような人生を歩んだのだろう。**

# **斬られて一命を落とした半助が哀れになり、心の中で手を合わせた。**

# **しかし、凄腕の半助を一太刀で斬り捨てる武士が、藩内にいるだろうかと不思議に思った。**

# **日が経つにつれて、長井主善を襲ったのは、熊崎半助だと噂が流れ、探索方も熊崎半助の交友関係を念入りに調べていた。**

# **熊崎半助は、口封じのために斬られたと探索方も考えていたが、進展のないまま月日だけは過ぎていった。**

# **数日後、清八郎は朝から山を見回っていた。**

# **この山は、子供の頃からの遊び場である。春は山菜、秋は、茸や栗、あけび、山葡萄を採った。**

# **冬は降り積もった雪の上をかんじきで山に**

# **入り、兎が通りそうな場所に、細い針金を輪にした仕掛けを括り付け、掛かるのを待った。**

# **なかなか上手くいかないが、多少なりとも食卓の足しにはなった。**

# **山の恵みを思いながら山道を登って行くと、編み笠を被った二人の武士が足早に下りて来た。**

# **すれ違い際に**

# **「ごめん」**

# **と挨拶をしたが返答がない。**

# **よそ者かと不審に思い振り返ったが、逃げるように素早く立ち去った。**

# **風体から、藩内の者でないことは想像出来たが、清八郎は気に留めずにその後も見回りを続けていた。**

# **すでに牛の刻になり急に腹が減ったので、握り飯を夢中で頬張った。**

# **急いで食べたせいか胸につかえ、水が飲みたくなり沢を下りると、人の気配を強く感じた。**

# **かすかな気配は、山道で二人の武士に出会った時から感じていたが、今は強い殺気に変わった。**

# **清八郎はこのままでは危険だと感じ、一刻も早くこの場から立ち去ることを決心した。起伏のある山を、木の枝に捕まり転げ落ちるように無我夢中で走った。**

# **二人組の素性がわからぬ以上、ここは逃げるのが得策と考えひたすら走った。**

# **清八郎も、兄幸三郎同様霧心流の使い手である。学問は嫌いだが剣にかけては、兄幸三郎も清八郎には到底叶わなかった。**

# **十五才の時、お殿様の御前試合で十番勝負に全て勝ち、あっぱれと言われた藩内一の剣の使い手である。**

# **山霧藩随一の剣の使い手だが、出来れば刀は抜きたくない。**

# **刀を抜けばどちらかの命はない。**

# **素性のわからぬ相手に命を捨てるわけにはいかない。**

# **母も七重も俺を待っていると思うと、清八**

# **郎はひたすら走り、ようやく町並みが見える場所に辿り着いた。**

# **ここまで来たらもう大丈夫だと思い立ち止まった。**

# **一気に走り抜けたせいか疲れて一息ついた。清八郎には油断があった。**

# **素性のわからぬ二人の武士が、山を知り尽くした清八郎を追いかけ追いついたのである。**

# **それに気づいた時清八郎は**

# **「まさか。ここまで追ってくるとは」**

# **「してやられたか」**

# **と狼狽えた。**

# **しかし、狼狽えた姿を見せれば相手の思うつぼである。**

# **間違いなく斬られる。**

# **二人の武士は、清八郎から三間くらい離れて対峙した。**

# **そして片方の武士が手前に一歩近づいて刀の柄に手を掛けた。**

# **その時とばかり清八郎は高声で**

# **「なぜ私を追うのか、その訳をお聞かせ願いたい」**

# **と叫んだが無言である。**

# **このまま黙って斬られる訳にはいかない。気持ちを奮い立たせ覚悟を決め、再び気勢を上げた。**

# **「お主らには、山霧藩随一の使い手**

# **松戸清八郎は斬れないぞ。**

# **そなたらの一人は、間違いなく命を落とす。**

# **もう片方も無事には帰れまい。**

# **襲う相手を見謝ったのが運の尽きだと思え。さぁ、早く刀を抜け」**

# **そう言って清八郎は、静かに刀を抜き中段に構えた。**

# **相手にも隙がない。**

# **相当な使い手であることは、清八郎もすぐにわかった。**

# **もう片方の武士が形相を変え、柄に手をかけ抜こうとしたが踏みとどまった。**

# **その後は刀を抜こうとしなかった。**

# **死に物狂いで挑んでくるこの男と刀を交えれば、どちらかが必ず命を落とすと感じたのだろう。**

# **命を懸けた重苦しい沈黙の時が過ぎ去った。二人の武士は無言のまま、逃げるように立ち去った。**

# **死の恐怖から解き放たれた清八郎は、ゆっくり息を吐いた。**

# **斬り合いにならなかったことを安堵して、刀を鞘に収めようとするが、指が固まって動かない。**

# **体には生気がなく、糸が切れた凧のようにふらふらと膝から崩れ落ちた。**

# **手足も震え、暫く立ち上がることが出来なかった。**

# **半刻ほど経ってようやく清八郎は平常心を取り戻した。**

# **あの二人は我が藩の侍ではない。**

# **一体何者だろう。**

# **姿を見られたので、口を封じようとしたのだと思った。**

# **藩内で良からぬ事が起きていると確信した。**

# **それから数日後、再び山霧藩を揺るがす一大事が起きた。**

# **今度は次席家老藤木又右衛門が刺客に襲われた。**

# **藤木殿は背中に深手を負い、明日おも知れぬ命だと噂が流れた。**

# **藩内は不穏な空気に包まれた。**

# **刺客が二人組だと知った時、藤木殿を襲ったのは、私を襲った二人だと確信し、探索方に身なりや面体を詳しく報告した。**

# **探索方から即刻ご重役に報告が上がった。まずはご重役の身辺警護に万全を期すため、腕の立つ武士が藩内から集められた。**

# **松戸清八郎も指名され、清八郎は首席家老長井主善の警護を命じられた。**

# **長井主善の左腕の傷は、まだ快復の途中だったが、藩の一大事と復帰し政を精力的に行**

# **った。**

# **藩中には度重なる不可解な事件を、今も殿様の跡目争いと考える者も多い。**

# **ご重役が少しでも対応を見謝れば、藩を二分する大騒動に発展しかねない状況だった。**

# **この状況をどう切り抜けるか、首席家老長井主善の手腕が問われることになった。**

# **次席家老藤木又右衛門は、治療の甲斐あって一命を取り止め、長井主善は心底安堵した。**

# **もしも藤木殿が亡くなっていたら、彼を慕う血気盛んな若者が、どんな過激な行動に出るか大変心配していた。**

# **江戸にいる藩主信貴公も、国元での相次ぐ不可解な事件に心を痛め、即刻ご近従久米幸三郎を、取り調べ責任者として国元に使わした。**

# **藩内の要所と国境に、仮の番所を設けて役人を常駐させ、不審者の探索をした。**

# **二十日余り過ぎても進展がなく、怪しい者を見つけることが出来なかった。**

# **この状況を早く打開しなければ、兄、久米幸三郎が責任を問われるに違いない。**

# **清八郎は不審な侍に出会った時のことを思い返した。**

# **不審な二人の侍は既に、藩の外に出たと清八郎は思った。**

# **二人の侍は、以前私が出会った山道を登り、峰を越えて藩の外に出たに違いない。**

# **そう考えれば、再び山道を通り藩内に入る可能性が高いと思い、その旨を長井様と兄の　幸三郎に伝えた。**

# **早速長井主善は、藩内から選りすぐりの五人の剣の使い手を選び、必ず捕縛するよう清八郎に命じた。**

# **次の日から五人は、夜通し山小屋で待機し、二人の不審な武士が通るのを待った。**

# **選ばれたのは沢木弥十郎、梅沢多聞、篠沢与作，西又弥平と清八郎の五人である。**

# **いずれも藩内の道場では名の知れた使い手である。**

# **しかし清八郎同様、人を斬ったことがない。**

# **いざ斬り合いとなれば、道場での腕前などさほどあてにならないことは承知している。**

# **山小屋では、多くを語らず、緊迫した雰囲気の中で五人は過ごした。**

# **もう限界に達していた。**

# **五日目の朝が来た。**

# **辺りはまだ霧に覆われている。**

# **その静けさの中を、山を下りるかすかな足音が聞こえると、見張りの篠沢与作が知らせて来た**

# **斜面を踏みしめる足音が、しだいに大きく聞こえるようになった。**

# **来たかと清八郎は思い、直ぐに他の三人に知らせた。**

# **「奴らが来た、遅れを取るな。**

# **生け捕りにせよとの命令だが、やむを得ない場合は斬っても良い。**

# **二人一組で相手を倒せ。**

# **くれぐれも油断するな」**

# **激を発した。**

# **そして山道を挟むように両側に分かれ**

# **木陰に身を隠した。**

# **編み笠を被った二人の武士が**

# **清八郎の前を横切ろうとした時**

# **「待てー、待てー」**

# **清八郎は高声を上げ、同時に四人は**

# **二人を取り囲んだ。**

# **「お主らは何者か。答えよ。**

# **答えなければ斬る。**

# **神妙にして刀を捨てよ。我等五人は**

# **山霧藩きっての剣の使い手だ」**

# **相手はそれを聞いて狼狽えた。**

# **来た道を必死で逃げようと二手に分かれて走ったが、すぐに追いつかれ囲まれた。**

# **すでに勝負はついたと思われたが**

# **二人とも刀を捨てる気配はなかった。**

# **捕まればいずれ死罪になることは知って**

# **いる。**

# **こ奴らは、命を捨てる覚悟だと清八郎は**

# **思った。**

# **手強いぞ。**

# **必死で刃向かうだろう。**

# **四人の者に**

# **「油断するな。斬り捨てよ」**

# **と叫び、清八郎は刀を抜いた。**

# **相手は清八郎に向かってきた。**

# **不思議に清八郎は怯まなかった。**

# **素早く間合いを詰め、踏み込んだ。**

# **相手目掛けて袈裟懸けに力の限り刀を**

# **振り下ろした。**

# **清八郎の剣先は、相手の左首筋から**

# **肩にかけて重く当たった。**

# **骨に当たったのか**

# **「ずぶっ」**

# **と鈍い音が耳に届いた。**

# **人の骨が砕けた音だと思った。**

# **その瞬間**

# **「う、うう」**

# **と呻きめき声を上げ、ゆっくりと頭から地面に倒れた。**

# **清八郎は、血まみれでのたうち回る無惨な姿を見て、頭の中が真っ白になった。**

# **初めて斬った人間が、命を落とそうとしていた。**

# **かすかに震えている体は次第に動かなくなり生き耐えた。**

# **これは現実ではない。**

# **夢を見ている。**

# **そう思いながら清八郎は気を失った。**

# **しばらくして**

# **「清八郎殿、清八郎殿、しっかりなされ」**

# **と叫ぶ声で、ようやく我に返った。**

# **我に返るとそこには、血に塗れた無惨な死体が横たわっていた。**

# **見るに忍びなくて顔を背けた。**

# **片方の相手は、左腕を切られて捕まり**

# **山を下りた後に、探索方に引き渡された。**

# **それからの清八郎は悪夢に魘され**

# **眠れない日々が続いた。**

# **藩命とは言え人一人を切り捨て、命を奪ったことを苦しんだ。**

# **藤木殿を襲った下手人が捕縛された噂が評判になり、五人には、首席家老長井主善より、お褒めの言葉と禄高の加増が申し渡された。**

# **特に松戸清八郎は、首席家老長井主善の信頼を得て、勘定山川方与力を命じられ二十石が加増された。**

# **清八郎の出世の噂は近所にも知れ渡り、多くの者がお祝いに駆けつけ、普段は口数の少ない母も大層嬉しそうであった。**

# **母の喜ぶ姿を見てから、魘されることも自然と消えていった。**

# **母の苦労を思うと少しは親孝行出来たと喜んだ。**

# **翌朝明け六つ、兄の久米幸三郎が**

# **「母上、清八郎、久しゅう御座います。」**

# **と元気な声で戸を開けた。**

# **兄は私を見るなり、**

# **「清八郎が大手柄を立て、禄高を加増され出世した噂を聞き、鼻が高かったぞ」**

# **と話した。**

# **兄の声を聞いて、久方ぶりの再会に、母は満面の笑みを浮かべ、早速朝食の支度を始め**

# **た。**

# **支度といってもご馳走は何もないが、兄が好きだったぜんまいとわらびの煮付け、たくわん、茄子の漬け物と味噌汁、そしていつもより大きめの碗に飯が盛られた。**

# **食べ慣れた母の味付けに、兄はよほど満足したらしく、膳の物を全てたいらげ美味しかったと言って母を喜ばせた。**

# **昔、兄弟で山を駆け回り、山菜を採ったことを思い出した。**

# **朝飯を食べ終わると兄は、早々に帰り支度を始めた。**

# **「いつまでこちらにいるのですか」**

# **と聞くと**

# **「まだ、事件の取り調べが続いているので、当分は帰れまい」**

# **と話した。**

# **次席家老藤木殿を襲った者の取り調べは連**

# **日続いたが、一向に真相が分からなかった。**

# **唯一、取り調べで分かったことは、江戸で**

# **二人が、金子八十両で殺害を依頼されたことである。**

# **依頼主は、顔を頭巾で覆っていたが、風体から年の頃は五十才を越えていたと白状した。**

# **清八郎が斬った者は、元は名だたる藩で剣術指南をしていたこともわかった。**

# **兄幸三郎は、母を宜しく頼むと言って城に向かった。**

# **その後も取り調べは続いたが、日が経つにつれ、人々の記憶から消えていった。**

# **早いもので、文月も終わろうとしていた。**

# **清八郎は、馬で村々を見回る長井主善のお供をしていた。**

# **今年は春先から天候に恵まれ、稲も順調に実っている。**

# **主善は清八郎に**

# **「今年の作柄をどう見るか」**

# **と尋ねた。**

# **清八郎には稲の知識が全くない。**

# **「私には良く分かりませんが、見たところいつもの年より稲穂が多いと思います」**

# **と答えると、主善は**

# **「その通りである。**

# **百姓を知るには、稲を知り、暮らしを知る事が一番大事だ」**

# **と言い**

# **「このまま育てば、今年は豊作が見込める」**

# **と大層なご機嫌であった。**

# **村々を見回り、昼八つ刻に赤谷村に着いた。**

# **いつものように名主の久右ヱ門が出迎えた。毎年見回りの時は久右ヱ門の庭先でお茶を頂き休息する。**

# **互いに十分気心を知っているので、堅苦しい挨拶はせず**

# **久右ヱ門は一言**

# **「お久しゅう御座います。お変わりなく何よりのことで御座います」**

# **と挨拶をした。**

# **主善は**

# **「久右ヱ門こそ、益々元気ではないか」**

# **と言い二人で笑い合った。**

# **稲や畑の作柄、村人の暮らしぶりを聞き、半刻ほどで久右ヱ門宅を後にしたが**

# **帰る途中清八郎は、無礼を承知で**

# **「ご家老様は、ご家来を連れずに**

# **なぜお一人で、村々を見回るのですか」**

# **と尋ねた。**

# **清八郎の不意の問いかけに**

# **主善は**

# **「家来を連れだって見回れば、民百姓が畏まって容易に本心を明かさない。**

# **こちらが一人ならば気軽に話をしてくれる。私も世情を詳しく知ることが出来る。**

# **それに、私も民百姓と同じ人間である。**

# **もしも、百姓の子として生まれたなら、毎日食べる事も容易でない、厳しい生活の中で生きなければならなかった。**

# **幸い下級武士の子として生まれたが、身近で飢えに苦しむ多くの民百姓を見て来た。**

# **今は、首席家老として政に携わっているが元を正せば皆同じ人間だ。**

# **政に携わる者は、民百姓の幸せ、家臣領民の幸せを第一に考え、命を捨てる覚悟で何事もなさねばならぬ」**

# **と話した。**

# **この言葉を聞いた清八郎は**

# **首席家老として藩のために命を懸ける**

# **長井主善の生き様に感銘を受けた。**

# **この先何が起ころうと、長井主善を守りたいと思った。**

# **次の日の暮れ六つ刻、兄の久米幸三郎が血相を変えてやって来た。**

# **江戸からの書状で、次席家老藤木殿を襲わせた者の正体がわかり、その者が藩のご重役五木新左衛門の義兄とわかった。**

# **幸三郎は、どう対応したら良いか清八郎の意見を聞きに来た。**

# **清八郎は事の重大さを知った時、藩を揺るがす大騒動になると思い、その夜戌の刻に長井主善の屋敷を訪ねた。**

# **急ぎの用と知った主善は、直ぐに客間に通した。**

# **兄、幸三郎は、日頃から長井様の政を行う姿勢を尊敬していた。**

# **初めて言葉を交わす幸三郎は深々と頭を下げて**

# **「清八郎の兄の久米幸三郎と申します。**

# **長井様には夜分誠に恐れ入ります。**

# **藩の一大事と考え、取り急ぎ参上致しました。**

# **何とぞお聞き入れをお願い申し上げます」**

# **と挨拶をした。**

# **主善は、堅苦しい挨拶は抜きにして何事か早く申せと迫り、幸三郎は事件の全貌を話した。**

# **話終えると、主善の顔色が見る見る強張っていくのが分かった。**

# **主善は暫く目を閉じ考え込んでいたが、**

# **「よく分かった」**

# **と言い、**

# **「幸三郎、至急江戸に戻り、五木新左衛門の義兄佐野十右衛門を取り調べ、他に関わった者がいないか即刻知らせよ。**

# **このことは他言してはならぬ。**

# **誰にも気付かれぬように内密に事を運べ。**

# **真相が判明次第、殿様とご重役にはこの主善が報告する」**

# **と話した。**

# **それを聞いて幸三郎はひとまず安堵した。**

# **次の日の明け六つ、久米幸三郎は江戸に向かっていた。**

# **長井様がこの事態をどう解決するのか、しかと見極めたいと思った。**

# **ただ幸三郎には、一つだけ疑問があった。**

# **昨日長井様は、突然佐野十右衛門の名前を言われたが、襲わせたのは五木新左衛門の義兄としか言わなかったのに、なぜ即座に、佐野十右衛門の名前を口にしたのか不思議でならなかった。**

# **もしや佐野十右衛門を知っているのではないかと思った。**

# **長井主善も、幸三郎から事件の経過を聞き苦悩していた。**

# **なぜ佐野十右衛門は、このような大それた事をしたのか。**

# **ひょっとしてあの時の、俺に対する恨みか。まだ忘れていなかったのか。**

# **と自問していた。**

# **主善は、遠い昔を思い出していた。**

# **今からおよそ四十年前の事で、当時長井真吾と名乗り、十五才だと記憶している。**

# **我が家は下級武士の家柄で、食うにも事欠く内情であったが、佐野家は代々組頭の家柄で、十右衛門の父も組頭を務め厳格であった。**

# **私は十右衛門より一つ年上で、年が近いせいか幼少より二人でよく遊んでいた。**

# **近くに千代という女の子がいて、よく私と**

# **十右衛門の後について来た。**

# **千代も私と同じ下級武士の娘で、年は私より三つ下だった。**

# **ある日、いつものように仲間と遊んでいる**

# **が、一向に千代の姿が見当たらない、どうしたのかと気にはなったが、多分家の手伝いをしているのだろうと思っていた。**

# **ところが、次の日も、次の日も、千代の姿が見えなかったので、私は不思議に思い千代の家を訪ねた。**

# **母様が**

# **「千代、千代、真吾様ですよ」**

# **と呼ぶが、千代は姿を見せなかった。**

# **私は母様に、お体でも悪いのですかと聞いたが**

# **「そうね・・」**

# **と言葉を濁したので不思議に思ったが、そのまま家路に着いた。**

# **明くる日も千代は姿を見せなかった。**

# **それから数日が過ぎ、遊びに出かけて行くと既にいつもの仲間が来ていた。**

# **ただ十右衛門の姿が見えなかった。**

# **その内仲間の一人が妙な事を言い始めた。**

# **十右衛門が町はずれで千代を待ち伏せ、嫌がる千代に乱暴したと話した。**

# **私は、十右衛門がそんな事をするはずが無いと思った。**

# **しかし見たかのように言うので**

# **「いい加減なことを言うな」**

# **と怒り、そやつをぶん殴ってしまった。**

# **興奮して殴ってしまったが、しだいに心の中では十右衛門を疑い始めた。**

# **本当ではと思う気持ちが高まり、千代が可哀想になり、夢中で十右衛門の家まで走った。事実なら遊びに来ないことも頷けると思い、佐野家に着くなり、十右衛門はいるかと聞くと、真杉塾に行って帰りは遅くなると言われた。**

# **明日は必ず十右衛門に会って、真実を確かめなければと思った。**

# **翌日は母の手伝いで忙しく、私は遅れて仲**

# **間に加わった。**

# **申の刻になり陽も大分西に傾いていたが、そこには十右衛門がいた。**

# **私を見た瞬間十右衛門は明らかに顔を強張らせた。**

# **千代のことを確かめようと近づいたが、仲間の前では聞けないので、場所を移ろうとした時、十右衛門が突然走り出した。**

# **「待てよ、十右衛門、十右衛門、待てよ」と叫びながら私は追いかけた。**

# **体力に勝る私はやがて追いつき、疲れて倒れ込んだ十右衛門に馬乗りになった。**

# **「なぜ、逃げるのだ」**

# **と問い詰め、**

# **「お前、千代に何をした」**

# **と言って襟首をつかみ殴ってしまった。**

# **完全に冷静さを失っていた。**

# **何回殴ったかは覚えていないが、十右衛門が、何も言わずに、涙を流していた姿を今も覚えている。**

# **今考えると、あの時取った私の行動が、その後の十右衛門の人生を狂わせたのだと思う。もっと冷静になり、十右衛門から真実を聞き、千代を思う真の気持ちを理解してやれば、事件が起きなかったのではと悔やんだ。**

# **厳格で知られた組頭の家柄故に、私の知らない所で、多くの者から罵りや侮辱を受けたと思う。**

# **後で千代に聞いたが、確かに十右衛門が千代を町外れで待ち伏せ、小屋に引き入れようとした事は事実らしい。**

# **しかし千代は、手を振り払ってその場を離れ何もなかったと話してくれた。**

# **その夕方、千代の家に十右衛門が一人で来て、悪かったと膝を着いて謝ったことを聞いた時、勝手に想像し十右衛門を殴り、些細な出来事を大きくした自分の浅はかさを恥じた。**

# **その後も機会を見ては謝ろうとしたが、十右衛門は、私の顔を見るとその場から逃げる**

# **ように立ち去った。**

# **十右衛門にとうとう悪かったと詫びの言葉を言えずに、年月だけが過ぎ去った。**

# **私が十八才の時に、十右衛門は江戸で学問**

# **を究めたいと、親類の家を頼って行ってしまった。**

# **いつしか私の記憶からも佐野十右衛門は消えていた。**

# **人間とは薄情で身勝手なものだとつくづく思う。**

# **本来佐野家は、十右衛門が家督を継がなければならないが、弟に家督を継がせるようだと世間で噂になった。**

# **振り返ればあの時以来、佐野十右衛門とは一度も会えずに、私も五十半ばになった。**

# **このままではいけない。**

# **十右衛門の命がある内に会わなければと主善は思った。**

# **二日後、江戸の久米幸三郎から主善の元に急ぎの書状が届いた。**

# **書状には十右衛門が覚悟を決めて、取り調べに素直に答えていると書かれていた。**

# **この度の事件は、佐野十右衛門が二人の刺客に八十両を渡して、主善と藤木又右衛門を襲わせたとあった。**

# **主善を襲ったのは熊崎半助で、二人の刺客が、熊崎半助を二十両で雇ったことを十右衛門も知っていた。**

# **刺客が口封じのために、熊崎半助を斬ったことも分かり、他に事件に関わった者がいないことも分かった。**

# **事件の動機は、学問を究めたいと江戸に出て高名な先生に学んだが、挫折して二ヶ月足らずで塾を辞めてしまった。**

# **それからは博打と遊郭に入り浸り、持っていた路銀も使い果たした。**

# **山霧の実家に帰ろうと思ったが、すでに弟が家督を継ぐことが決まり帰れなくなった。その後はすさんだ生活を繰り返し、悪事に手を染めるようになり、悪党の仲間に入った。**

# **悪事を繰り返す内に、すさんだ生活に疲れ果て、こんな身の上になったのは、自分の居場所を奪った山霧藩だと、逆恨みするようになった。**

# **それが事件を起こす発端になったと書かれていた。**

# **首席家老長井主善と、次席家老藤木又右衛門を襲わせた理由は、跡継ぎを廻る藩内の対立を知り、勢力争いに思わせる狙いがあった。**

# **また十右衛門には馴染みの女がいて、その女との間に男の子がいるようだと書かれていた。**

# **女を知るものに聞いたところ、年のころは五十過ぎで名は千代と言い、健気な女で、どんなに悪態をつかれても口答えせず、尽くしていたと書かれていた。**

# **主善は、書状の中に千代の名があることに唖然とした。**

# **千代は、十右衛門が江戸に行ったことを知り追ったのだと思った。**

# **千代は優しい子であった。**

# **十右衛門が山霧で辛い目に遭っている姿を見て、自らを責めたのだろう。**

# **十右衛門に寄り添うことで、心の傷を癒したのだろうと思った。**

# **その元をつくったのは正しくこの俺である。幼なじみの二人の人生を狂わせたことを嘆いた。**

# **「そうか、これが事件の全貌か、恨まれて当然だ。**

# **十右衛門は心底俺を恨んでいたのだ」**

# **深くため息をついた。**

# **十右衛門の命ある内に、是が非でも会って言葉を交わしたいとしみじみ思った。**

# **主善には他にも気がかりな事があった。**

# **事件の首謀者である佐野十右衛門には妹がいた。**

# **妹は、藩のご重役を勤める五木新左衛門の**

# **妻である。**

# **主善は、佐野十右衛門が、義弟の五木新左衛門の名前を口にするのではないかと怖れていた。**

# **五木新左衛門が関わりのない事は百も承知だが、もしも一言でも、五木新左衛門の名前を口にすれば、後々面倒になる事は言うまで**

# **もない。**

# **久米幸三郎の取り調べで、五木新左衛門の名前が出なかった事を聞き、これから行われる評定で、たとえ問いただされても一切関わりないと申し開きが出来ると思った。**

# **主善は今日まで、御側用人五木新左衛門の手腕を高く評価し、側で政の全てを教えてきた。**

# **新左衛門は四十三才と若いが、見識も高く、人望もあり、果敢に行動する悦材で、山霧藩を背負って行く人物である。**

# **しかし、重罪人佐野十右衛門の妹が、五木新左衛門の妻と公になれば、五木新左衛門に**

# **対する様々な風評が起こり、風当たりが強くなる。**

# **特に九死に一生を得た、次席家老藤木殿を慕う家臣は黙っていまいと考えると、ここをどう収めるかが肝心だと思った。**

# **次の日、次席家老藤木又右衛門の屋敷を訪ねた。**

# **藤木の体は大分快復していた。**

# **藤木は私より二つ年上の五十七才で、昔は**

# **良く酒を酌み交わし語り尽くしたものだが、年と共に機会がめっぽう少なくなった。**

# **時々考え方が異なり、激しく対立したが**

# **山霧藩の行く末を思う気持ちは同じである。**

# **主善は着くなり**

# **「突然お伺いし誠に申し訳ない。**

# **是非とも、藤木殿のお力とお知恵を拝借したい。」**

# **と言い、この度の事件の全貌を話した。**

# **佐野十右衛門は江戸住まいだが、山霧藩の由緒ある家柄の者が、このような大事件を起こした事を聞いて、藤木も途方に暮れていた。**

# **冷静さを取り戻すには、多少の時間がかかったが、ようやく藤木は語り始めた。**

# **「佐野十右衛門の死罪は免れまいが**

# **佐野十右衛門の妹を娶っている五木殿に**

# **矛先が向かわないか心配だ」**

# **藤木も五木の事は主善同様藩内一の逸材と考え、新左衛門以外に、藩の行く末を担える者はいないと思っている。**

# **主善は**

# **「私も、藤木殿同様、新左衛門に**

# **矛先が向かうのを怖れています。**

# **矛先が新左衛門に向かったら、何としても止めなければなりません。**

# **その時は、新左衛門に累が及ばぬよう藤木殿にご助言をお願いしたい。**

# **どうかお願い申し上げる」**

# **と頭を下げた。**

# **藤木は**

# **「承知しました」**

# **と言い、**

# **「お互い、この年まで生きると、予期せぬ事を見なければなりませんな」**

# **と笑った。**

# **主善は、藤木の配慮に感謝し、これからが**

# **正念場だと思った。**

# **しかし、既に藩内では、佐野十右衛門が首席家老長井主善と、次席家老藤木又右衛門を殺害しようとした張本人で、十右衛門の妹が、五木新左衛門の妻であると噂されていた。**

# **翌日の戌の刻、主善は五木新左衛門を自宅に招いた。**

# **新左衛門はなぜ招かれたのか十分承知していた。**

# **妻の兄とは疎遠で音信が無いとはいえ、義兄が恐ろしい事件の張本人だと知らせる書状**

# **が、江戸の親戚より何通も届いた。**

# **新左衛門は事件の重大さを考え、まずはお役目を退く事を決意し、その後は謹慎して、殿様のご沙汰を待つ覚悟で主善宅を訪ねた。主善は新左衛門を見ると**

# **「良く来たな、まずは座って飲もう」**

# **と話したが、新左衛門はその前にお伝えしたいと事件に触れ、義兄が藩を揺るがす大事件を起こし、山霧藩と殿様の名誉を辱め、**

# **長井様と藤木様に危害を加えた事を深く詫びた。**

# **その上で自らの覚悟を話した。**

# **主善は**

# **「ここは、全て俺に任せてくれ。**

# **まずは殿様のご沙汰があるまでゆっくり休め。**

# **ただ早まったまねだけはするな」**

# **と釘をさした。**

# **新左衛門は**

# **「主善様の仰せの通りに致します」**

# **と答えた。**

# **その夜は互いに酔いつぶれるまで飲んだ。**

# **翌日、ご重役による評定が開かれた。**

# **すでにご重役には評定の内容は伝えられていた。**

# **評定は、首席家老長井主善、次席家老藤木又右衛門、大目付松戸与五郎、勘定奉行石井主計の四人で行われた。**

# **むろんその席には五木新左衛門の姿はなか**

# **った。**

# **長井主善が事件の詳細を報告した。**

# **特に事件の張本人佐野十右衛門の江戸での暮らしぶり、二人の刺客との繋がり、事件を起こすに至った経緯が報告された。**

# **報告が終わり佐野十右衛門の処分と、今後の対応策が話し合われた。**

# **当然のごとく、佐野十右衛門と生き残った刺客は死罪と決まった。**

# **ここまでは予想していたが、その後に勘定奉行石井主計が、主善の怖れていたことを話し始めた。**

# **「今世間では、事件の張本人佐野十右衛門の妹が、五木新左衛門殿のご内儀と噂し、佐野十右衛門を、長井殿、藤木殿の命を狙った極悪人と言っております。**

# **このまま放置すれば、悪い風評が他藩にも幕府にも知れ渡り、山霧藩の名声は失墜し、幕府のお咎めがあるかも知れません。**

# **この噂を早急に静める事が大事と思います。長井様はどのようにお考えですか」**

# **と尋ねた。**

# **主善は**

# **「私も、世間の噂は十分承知している。**

# **しかし、今は噂が静まるのを耐えて待つしかないと考える。**

# **事件の本質を見極め、関わった者は厳正に処罰し、いらぬ言動を慎み、一同力を合わせて、この不名誉な事態を乗り越えなくてはならぬ」**

# **と話した。**

# **それを聞いた藤木又右衛門は**

# **「主善殿の言う通りだ。ここは我々家臣一同が結束して、山霧藩を守らねばならぬ」**

# **と同調した。**

# **再び石井主計が**

# **「このまま待っていても、この不名誉な噂がそう簡単に静まるとは思えません。**

# **ここは藩として、何らかのけじめが必要と思います。**

# **けじめをどのようにすべきか、奉行にも**

# **出席頂き、評定を開くべきだと考えます」**

# **と言った。**

# **確かに石井主計の意見は正論である。**

# **奉行を勤める者の意見を聞く事に反対は出来ない。**

# **次の評定は、奉行が出席する事に決まった。**

# **主善はこの事件を、是が非でも奉行が出席する評定で終わりにせねばと思った。**

# **藩の一大事の解決に、首席家老が責任を負う事は当然至極で、誰も止める事は出来まい。今がその時だと覚悟を決めた。**

# **噂の渦中にいる五木新左衛門には、何の落ち度も咎もない。**

# **佐野十右衛門とは何の関わりもなく接触もない。**

# **まして佐野家はすでに弟が家督を継いでいる。**

# **その事を話せば、ご重役も奉行もわかってくれると思った。**

# **ご重役と奉行による評定は、取り調べ責任者の久米幸三郎が帰国した後で行うことが決まった。**

# **主善は評定の前に、次席家老藤木又右衛門に覚悟を伝えたいと思い藤木宅を訪ねた。**

# **藤木殿は、首席家老を辞する事に最初は反対したが、堅い決意を知り承諾してくれた。その上で藤木殿に、五木新左衛門が山霧藩のために、存分に働けるよう後ろ盾になってくれと頼んだ。**

# **藤木は、私も年寄りだが主善殿の心中は良**

# **くわかったと言って承諾してくれた。**

# **長月の十三日に久米幸三郎が帰国した。**

# **翌日の羊の刻、ご重役四人と奉行八人による評定が開かれた。**

# **久米幸三郎より事件の詳細が報告され、**

# **佐野十右衛門と刺客は厳罰に処し死罪に決まった。**

# **そして首席家老、長井主善が話し始めた。**

# **「今、報告された事が全てである。**

# **山霧藩に取っても、殿様に取っても、我ら家臣に取っても誠に不名誉な事である。**

# **世間で様々な風評が飛び交っている事は承知している。**

# **しかし今は、家臣一同が結束して騒がぬように見守って頂きたい」**

# **と話した。**

# **その後勘定奉行石井主計が、**

# **「先ほど長居様は、世間では様々な噂が飛び交っていると言われたが、正に世間では、五木新左衛門殿のご内儀が、極悪人佐野十右衛門の妹と噂をしております。**

# **この噂を放置すれば、他藩にもまた幕府にも知れ渡る事は必定です。**

# **この事態を静める何か良い策があれば、皆様方のご意見をお聞かせ願いたい」**

# **と話した。**

# **皆思いはあるが、個人の名誉に関わる事を、そう容易に語れるはずもなく意見は出なかった。**

# **主善は今日ここで全てを終わらせる決心をした。**

# **首席家老として最後の言葉発した。**

# **「先程、五木新左衛門殿のご内儀が佐野十右衛門の妹だと言われたが、それは紛れもない事実である。**

# **また十右衛門が、十八才の時に江戸に出て以来一度も山霧に帰らず、身を持ち崩してこの度の事件を起こした事も事実である。**

# **佐野家は十右衛門が江戸に出た後に、弟に家督を継がせたのも事実である。**

# **五木新左衛門殿が一度も、義兄佐野十右衛門と面識が無いのも事実である。**

# **それらの事を考えれば、世間の噂がどうであれ、五木新左衛門殿とご内儀に、どれ程の咎があるのか冷静に判断しなければならぬ。**

# **世間がどのように噂しようと、ここは山霧藩一万石が取るべき正義を示して、騒がずに新左衛門殿とご内儀を見守って頂きたい。**

# **これが私の最後の願いである。**

# **しかし、このように藩内を混乱させた責任は、首席家老として重大である。**

# **今日限り首席家老の座を辞する事を申し上**

# **げたい」**

# **この言葉を聞いたご重役と八人の奉行は、予想しなかった結末に驚き、もはや異論はなかった。**

# **長井主善が首席家老の座を退いた噂は、**

# **その日の内に藩内に広がった。**

# **山霧藩の安泰と結束を考え、身を捨てて**

# **難題を解決した長井主善の潔さを称賛した。**

# **日が経つにつれて噂は少しずつ消えていった。**

# **神無月の三日に新しく藩のご重役も決まった。**

# **首席家老藤木又右衛門、次席家老五木新左衛門、御側用人松戸与五郎、大目付石井主計、勘定奉行には、材木奉行で手柄を立てた榊源三郎が就任した。**

# **次席家老に五木新左衛門の就任を知り、主善は、首席家老藤木殿が適切な判断を下されたと感謝した。**

# **これで山霧藩は、力強く新たな出発が出来ると喜んだ。**

# **家老の座を辞し、自らにけじめを付けた主善は、一刻も早く身支度を整え江戸に出向き、佐野十右衛門に会わなければと考えていた。**

# **主善は、久米幸三郎より三日遅れて江戸に向かった。**

# **久米幸三郎は、佐野十右衛門の刑を見届けるために江戸に行くのだが、主善がなぜ江戸に行くのか不思議でならなかった。**

# **ひょっとして、十右衛門に会いに行くのではと思った。**

# **以前私が、事件の張本人は五木殿の義兄と言った時、即座に十右衛門の名前を口にした。年も近いし幼なじみか*も*知れないと思った。**

# **それに長井殿は江戸へ出立する前に、江戸詰めの者は、山霧の何を食べたいか尋ね、私が納豆と茶羊菓子だと話すと、迷わず納豆と高価な茶羊菓子を買われた。**

# **幸三郎は江戸に向かう道中、長井殿と十右衛門の事が頭から離れなかった。**

# **長井主善もまた、江戸でどのように十右衛**

# **門に会ったら良いか思案していた。**

# **突然、長井真吾と名乗れば、一瞬に十右衛門は俺を避けて黙るだろう。**

# **そんな別れはしたくない。**

# **長井真吾と悟られてはならぬと思った。**

# **それならば隠居の姿で会おうと思い**

# **江戸についたら衣類を手配させようと思った。**

# **神無月の二十五日、ようやく江戸に着いた。**

# **幸三郎が到着を待っていた。**

# **佐野十右衛門の刑の執行は二日後の辰の刻と決まった。**

# **それを聞いた主善は幸三郎に、刑が執り行われる日の朝飯に、山霧の納豆と茶羊菓子を添えるよう頼み、十右衛門と少し話がしたいので時間をくれと頼んだ。**

# **十右衛門に食べさせたくて、山霧の納豆と茶羊菓子を買ってきたと思うと、特別仲が良かったのだろうと幸三郎は思った。**

# **二日が過ぎ当日の朝が来た。**

# **外は多少の風はあるが雲一つない青空で、神無月には希な穏やかさである。**

# **主善は、十右衛門に会うために隠居の姿に身を変え牢屋敷に入った。**

# **既に久米幸三郎が待っていた。**

# **幸三郎に**

# **「頼んだ納豆と茶羊菓子を添えてくれたか」**

# **と聞いた。**

# **幸三郎は**

# **「見たところ、**

# **既に食べたようで御座います」**

# **と話した。**

# **主善を十右衛門が入っている牢の前に案内し、十右衛門に話しかけた。**

# **「十右衛門、お前に会いに**

# **山霧より来られた方がおる。**

# **朝飯に添えた納豆と茶羊菓子は**

# **その方がお持ちしたものだ」**

# **と話した。**

# **それを聞いて十右衛門は**

# **「大変美味しく頂きました。**

# **有り難う御座います」**

# **と言った。**

# **幸三郎は、主善を残してその場を離れようとしたが、突然主善が**

# **「納豆と茶羊菓子を届けてくれと頼んだ者から、十右衛門に言づてを預かっている。**

# **牢に入れてもらえないか」**

# **と幸三郎に頼んだ。**

# **幸三郎は**

# **「それは、それだけはいけません」**

# **と言ったが、隠居の身だ。**

# **大丈夫だと言うので、仕方なく牢の錠を開けさせた。**

# **主善は牢の中に入った。**

# **四十年ぶりの佐野十右衛門は、変わり果てていたが、どこかに面影があった。**

# **主善は**

# **「さっき食べた納豆と茶羊菓子は、山霧で虐められた時、お前さんに助けられた者から、届けてくれと託された物だ」**

# **と話した。**

# **十右衛門は**

# **「俺みたいな悪人に、そんな気遣いを頂き有り難いことです。**

# **その方にお会いしましたら、美味しいと**

# **言っていたとお伝え下さい」**

# **と頭を下げた。**

# **主善は**

# **「実は俺も、幼なじみに会いに江戸にやって来た」**

# **と話した。**

# **「遠い昔、この隠居にも仲の良い弟分がいて、良く山霧の山や川を駆けずり回って遊んだ。**

# **春には山菜を採り、川で鮒や鯉を釣り、夏は沼や川で泳ぎ、秋は茸、あけび、栗、山葡萄を取って良く食べた。**

# **ところがある日、その弟分が悪さをした噂が耳に入り、事実を確かめずに、勝手に思い込んだ俺は、弟分を一方的に殴りつけて追い詰めてしまった。**

# **そうこうしている間に、些細な事が大げさになり、真実と違う噂が広がり、弟分は陰口や罵りを受け、とうとう居づらくなって、山霧を出て江戸に行ってしまった。**

# **それ以来四十年近く会っていない。**

# **会ってあの時の事を謝りたいと思って、江戸に来た」**

# **十右衛門は、黙って涙をこらえて聞いていたが、かすかな声で**

# **「弟分と会えるといいですね。**

# **ご隠居さんの気持ちは、今の弟分は、きっとわかってくれると思います。」**

# **と言った。**

# **その言葉を聞いた主善はもう何も話すことが出来なかった。**

# **主善は、十右衛門が一緒に暮らしていた千代と子供を捜し出し、出来る限りの手助けをすると伝えたかったが、この期に及んで十右衛門の心情を考えると言えなかった。**

# **暫く、互いに無言のままでいたが、幸三郎がしきりにこちらを伺うのを見て、もうそろそろだなと思い、**

# **「この隠居の長話を、聞いてもらい**

# **嬉しかった。さらばだ」**

# **と言って牢を後にした。**

# **牢を出た瞬間、主善は何とも言えない寂しさと空しさに襲われた。**

# **人の一生の儚さを思った。**

# **暫くして佐野十右衛門は、最後の時を迎えた。**

# **その時、幸三郎に**

# **「長井真吾と会えて嬉しかった。**

# **納豆と美味しい茶羊菓子を食べて、山霧の懐かしい思い出が目に浮かんだ。**

# **すまぬ事をしたと伝えてくれ」**

# **と言い残したと聞いた。**

# **「十右衛門よ、お前が一番心残りだった千代と子供の消息を必ず突き止め、出来る限り面倒はみるから安心して眠ってくれ、お前との思い出は、生涯決して忘れないよ」**

# **と主善は目を閉じ合掌した。**

# **数日後主善は、藩主信貴公に謁見したのち帰路に着いた。**

# **霜月になり、朝夕が一段と冷え、野山も色鮮やかに紅葉している。旅の途中、冷たい風が木の葉と共に足下を走った。**

# **山霧はもうすぐ雪が舞うだろうと思った。**

# **そして何事もなかったかのように年の瀬を迎えた。**

# **それから五ヶ月余りが経ち、皐月を迎えた。**

# **長井主善は、次席家老五木新左衛門と**

# **新左衛門の配下となった松戸清八郎の三人で、山回りをしていた。**

# **ご神木の前に差し掛かると、既に三人の先客がいて、近寄って見ると蒼姫が供の者とご神木を見上げていた。**

# **清八郎は**

# **「姫様も来ておられましたか」**

# **と挨拶をした。**

# **蒼姫は笑みを浮かべ**

# **「これは長井殿、それに五木殿もご一緒で、どちらにいかれるのですか」**

# **と聞いた。**

# **清八郎は**

# **「これからこの山道を登り、山霧が一望出来る場所を目指します」**

# **と答えた。**

# **「さすれば、ご一緒させてもらえませぬか」と頼まれ、それではと、六人でその場所を目指した。**

# **頂上は、雲一つ無い青空に恵まれ、吹く風も清々しく心地良く感じられた。**

# **長井主善は山霧の領内を眺めながら**

# **「五木殿、清八郎、これからは若いそなた達の時代じゃ、山霧藩の行く末を頼むぞ」**

# **と言った。**

# **そして六人が一緒に大きな声で叫んだ。**

# **「北を見渡せば、白い神の山々が連なり、西を見渡せば、雄大な日本海が見える。**

# **ここは山霧藩一万石、穏やかな良い国である」**

# **と声高く叫んだ。**

# **山霧藩一万石は、真に良い国である。**